

# 田舎暮らしを楽しむ

(14)

佐藤 彰啓



周辺の景観にマッチした家を造りたい。

せつかく田舎暮らしをするのだから、快適な住まいにしたい。それは敷地が狭い都市の住宅とも昔ながらの農村の住宅とも異なり、「都会の合理性を保ちながら、自然との調和を求める住まい」といえよう。これまで定年後の「田園住宅」をテーマに取り組んできた経験から、具体的に設計プランを立てるに際しポイントをいくつかあげよう。

## ▼周辺景観と調和を

日本の農村の景観は、地方色

豊かな茅葺(かやぶ)き民家や土蔵のある農家がそれぞれ

## 家の手当て(2)

れ地方色ある景観を形成してきた。いずれにしても、新たに一軒家を建てることは、その地の景観をつくることであり、これまでの美しい景観が損なわれるようなことがあつてはいけない。その地方の伝統的な民家の形態を研究して生かすことや、屋根や外壁の色は原色系を避けて、あたりの景観に溶け込むものになりたい。

また外壁はできるかぎり新建材を使わず、自然の素朴さを生かした塗り壁や板張り仕上げにす

## 合理性保ち、自然になじます

るのが望ましい。

## ▼眺望は積極的に取り入れる

周辺の眺望と借景は住まいの中に積極的に生かしたいもの。遠方に山々が望める場所であれば、リビングやダイニングから居ながらにして眺められるよう、窓の開閉部を思い切つて広くするとよい。

## ▼広さはほどほどに

都会では住居の中に物があふれ、なくても困らないものが収納スペースを占拠している。これをそのまま田舎に持ち込むのではなく、移り住むことを契機にシンプル生活に切り替えてみてはどうだろう。リタイア後の夫婦二人が快適に暮らすには、広すぎると掃除や管理が負担になる。でも子どもや孫が遊びに来た時、泊まれる部屋は確保したい。延べ床面積は二十五坪(一坪は三・三平方メートル)から三十坪あれば十分である。実際に田舎で生活してみるとネクタイやスーツは要らない、せいぜい礼服が一着あればいい。ほんとうに必要なものだけで暮らすことが、田舎での快適生活なのである。

(ふるさと情報館代表)